

2024年1月21日 No.3703

先週の講壇から

「愛された子」

マタイによる福音書 第3章 13節～17節

聖句「そのとき、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。」(3:17)

1. 《幸せの喪失》 少子化は単に「出生率の低迷」等というレベルの問題ではありません。育児相談に来るお母さんたちの多くが「自分は幸せではない」と感じている。親たちが幸せを感じられないなら、その子どもが幸せを感じられなくて当たり前です。北海道では、脱サラやUターンで農業を始めた人が、経営が軌道に乗り始めた頃に離農します。子どもが巣立って、子どもの笑顔が消えるからです。
2. 《愛する子よ》 福音書を読んでも、イエスさまの笑顔は余り思い浮かびません。せいぜい、ファリサイ派の不寛容を冷笑したり、愚かな弟子たちの言い争いに苦笑いする程度でしょうか。しかし、赤ん坊のような笑顔があるとしたら、この「イエス、洗礼を受ける」の場面です。何しろ、写真屋さんが家族写真を撮る時のように「鳩が出ます」から。聖書学的には「天が開く」は、神の臨在を表わす語です。しかし、それ以上に、雲の切れ間から「天上の青」が臨んだり、「ヤコブの梯子、天国の階段」が現われたりした時の、言葉に出来ない感動があります。そして何より、神さまが「愛する子よ」と、直接、イエスさまに呼びかけてくださったのです。これ以上の輝かしい瞬間は他にありません。
3. 《本当の祝福》 そもそも、イエスさまは「祝福されない子」でした。親たちから心待ちにされて産まれて来たものではありません。妊娠が発覚した時、ヨセフはマリアと離縁しようとしたくらいです。ヨセフ一家の中で、イエスさまは本当に愛されて祝福されていたのだらうかと思います。勿論、ヨセフもマリアも御言葉に従う信仰の人でしたから、他の弟妹とも分け隔てなく育てようと努力したはずで、とは言え、実態は分かりません。少年時代の物語が端折られている分、余計に気になります。けれども、それを補って余りあるのが「愛する子よ」という神の呼びかけです。結局、私たちの洗礼も同じ出来事ではなかったでしょうか。こんな私を神さまは愛してくださるのです。たとえ今、幸せを感じられなくても、愛されず孤独でも、神は「愛する子よ」と言われる。ここに祝福があります。

朝日研一朗牧師